

# 日常生活における想像力と

サン＝テグジュペリ著

## 『星の王子さま』をめぐって

磯部 景子

おとなが子どもと生活するときに、子どもが、今、もどめていることは、何かしらと思いつぐらしたり、一つのことがらについて、いくつかの方向から考えてみるなど、おとなの想像力の大切さを思う。

\*

幼稚園実習を出発点として、子どもたちのいるところで、子どもや保育について学びはじめた頃、私に

とっては、あまりにも不思議な光景に、たびたび出会った。ずいぶん昔のことなのに、時折、それらの場面を思い出す。いくつか例をあげてみたい。

お茶の水女子大学附属幼稚園で、はじめて教育実習をしたとき、私は、三歳児のクラスで実習することになった。

ある日、一人の男の子が、両手を飛行機の翼のように広げて椅子の上に立って、「せんせい、エンジンか

けて」と言った。先生は、子どもの後に立ち、燃料を入れて、エンジンをかける。その間、先生は子どもに何か語りかけているが、私には聞こえない。そのうち、飛行機は「ブーン」とうなり声をあげはじめた。飛行機は保育室を飛び立ち、園庭を横切り、山の上へ（園庭の向こうのしげみを越えた高台にある、もう一つの園庭で、通称「山の上」といつていた）消えていった。

私は、この場面に出会った時、子どもが飛行機になりきって、飛び立っていったことにも驚いたが、もつとびつくりしたのは、先生も子どもも、ごく普通のこととしてふるまっていたことだった。あたりには、賑やかではないが、ある種の活気が感じられたし、ある雰囲気はただよっていたことが印象ぶかい。

私の日常生活とは、あまりにもかけ離れていると思っただ。

次の例は、お茶の水女子大学に大学院ができて間もない頃、研究室の先生や四・五名の院生と、年間をと

おして、五歳児のクラスへ通っていた時のものである。

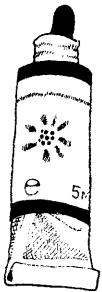
その一つは、物語の一場面に出くわしたような例である。

園庭で、五歳児のクラスのK子がひとり、藤でできた直径五十センチくらいの輪を片手に持って、向こうから走ってきた。K子は、ふと立ち止まり、輪を、両手で顔の前にかざす。

「かがみよ、かがみよいっておくれ。せかいでいちばんうつくしいのは、だれっ」

と言いおわるや、K子は、また、藤の輪を片手に走り去った。

物語の人物になりきった、K子のいきいきとした様子が、今でも印象に残っている。一瞬ではあったが、『白雪姫』のせかいが感じられた。



二つ目は、五歳児の保育室で、「福引き」の遊びが、盛りあがっていた場面である。

保育室の一つのコーナーに、福引きの景品引き換え所ができていた。机の上に箱積み木を重ね、中央に窓口がある。景品引き換え所から少し離れたところで、子どもたちがくじを引いていて、賑わっている。くじを引いては、景品を受け取りに行く。くじも、景品引き換え所も、子どもたちが作ったものである。

子どもたちが入れ替わり立ち替わり、景品引き換え所の窓口に向かう。窓口の奥にはY子がいて、景品をわたしている。しばらくして、景品がなくなる。Y子はおもてに出てきて、箱積み木で窓口を閉じる。

「よるです」  
と、まわりにいる子どもたちに告げる。

Y子は、景品引き換え所を離れて、紙をとりに行く。別のコーナーで机に向かつて、マジックペンで大きく「おやすみ」と書いて、もどってくる。閉じた窓

口に「おやすみ」の紙をはる。

子どもたちは、景品引き換え所をそのままにして、園庭へ出て行く。保育室は静かになり、園庭で次の活動がはじまる。

子どもたちが満足感を味わって、次の活動に移っていったことに、そこに居合わせた私も満ち足りた気分になった。

「福引き」の遊びに満足して、次の活動へと移る、その展開のみごとさと、不思議な光景は忘れられない。

次の例は、二歳三カ月の私の姪のT子が、祖父母の家にあずけられた日のできごとである。T子は、両親といっしょに、祖父母の家ですごしたことはあったが、両親のいないところで、一人でいるのははじめてであった。

私は帰省していて、久しぶりにT子に会う。

T子は、何か落ち着かない様子で、家の中をあちらこちらと歩きまわる。T子の祖母がタオルで作った熊のぬいぐるみを、ちよっと抱きしめて、間もなく手放

す。深さ二十センチくらいの、子どもが一人だけ入れる大きさのダンボールの箱に入つてすわるが、すぐでてくる。二階への階段をみつめて、のぼりはじめる。

二階で、直径二十三センチくらいのビニールボールを見つける。

T子の後について歩いていた私に、「バレーボールしよう。わたし、コズエよ」と言い、「あんた○○になつて」と命令口調で言う。T子は、「ハイッ」と大きい声をはりあげて、ボールを私に向かって投げる。

私は、ボールをうけとめて、「ハイッ」と言つて打ち返す。

「アタック・ナンバーワン」だな、と私は思うが、  
「アタック・ナンバーワン」がどのようなテレビドラマなのか、コズエ以外にどういふ人物が登場しているのか、私は知らない。ボールが飛んでくるたびに、私は、「ハイッ」と言つて、ボールを打ち返す。

T子は、床すれすれに手をさしのべて、張り切つた様子でボールを打ち上げたり、打つふりをする。お互

いに打ちあげたボールは、相手の手元には届かないで、とんでもない方向に飛んだりする。

間もなくT子は、「わたし、T子ちゃん」と言つて、バレーボールをやめる。

また、家の中を歩きまわる。やがて、絵本『きかんしゃやえもん』をみつめてきて、「よんで」と言う。足をなげだしてすわり、本をひざの上におく。

私は、T子の変わり身のはやさに、とまどつてしまった。

以上述べた四つの例は、子どもたちとの生活になれていない私にも、受けとめることのできたものである。

子どもは、想像力をフル回転して生きている。現実の時間や空間をこえて、現実のせかいを、自由にいききして生きていることを実感した。

\*

さて、二〇〇〇年三月のある日のこと、テレビの

ニュースで、「今年は、サンIIテグジュペリの生誕一〇〇年にあたること」、「サンIIテグジュペリ著『星の王子さま』が、オリジナル版の挿絵にもとずいて出版されたこと」を報じていた。

『星の王子さま』を、岩波少年文庫や愛蔵版で読んだことがあるが、いちばん印象に残っているのは、飛行士が、小さな星からきた王子さまに頼まれて、さまざまヒツジをかいだが、どのヒツジも王子さまの気にいらなかったこと、そこで、飛行士が、ヒツジのかわりに、“三つの穴のある箱”をかい、王子さまにみせると、王子さまが、箱の中に、自分のほしいヒツジをみて満足するくだりである。

はじめて『星の王子さま』を読んで以来、私は、“箱”の中にヒツジをみることでできる想像力にあげられ、目にはみえないものを感じられるようでありたいと願いつづけている。

オリジナル版で、久しぶりに『星の王子さま』を読んだ。

『星の王子さま』は、「レオン・ウエルトに」の献辞にはじまるが、献辞はこの物語の序文になっている。

著者は序文で、この本を友人レオン・ウエルトにさげ理由をいくつか述べたあとに、おとなは、だれも、はじめは子どもだった。(しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもない。)そこで、わたしは、わたしの献辞を、こう書きあらためる。

「子どもだったころのレオン・ウエルトに」(注1)と結んでいる。

『星の王子さま』は、著者自身による挿絵が随所に描かれている、おのおの、短い二十七章からなる小さな作品である。

一章では、著者は、絵かきになることをやめて、飛行士になったわけを述べている。二章は、前述した飛行士と王子さまが出会う場面だが、その場面は、私の想像をはるかにこえた、次の様な極限状況である。

飛行士は、人の住んでいるところから千マイルもはなれた、だれもない砂漠で、一週間の飲み水がある

かないか、生きるか死ぬかの状況で、ひとり、飛行機を修理しようとしている。はじめての日の晩、砂地で眠る。夜があける。王子さまの小さな声がして、目をさます。

『星の王子さま』の物語は、この様な極限状況を背景とした幻想のせかいである。

三章からは、王子さまが飛行士に語ったことから、飛行士が王子さまとの思い出として、述べていく。王子さまは、飛行士に出会うまでに、ふるさとの小さな星をあとにして、さまざまな星をめぐって地球にやってくる。最初にヘビに会う。ヘビはなぞめいたことを言う。花に会い、キツネと出会う。キツネはへ仲よくなることについて、ふしぎなことを語る。

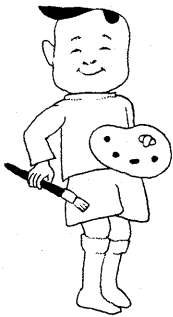
仲よくなると、お日さまにあたったような気もちになるし、足音も音楽をきいているような気もちになるという。わかれる時、キツネは王子さまに、おみやげとして秘密をおくりものにする——心でみなくては、ものごとはよく見えないこと、かんじんなことは目には

見えないことなど——。

二十四章、飛行機が不時着して八日目、王子さまのどがかわいて、飛行士と二人で砂漠の中で井戸をさがし歩く。出会ったばかりの頃とは異なり、二人のやりとりは、ぴったり呼吸があう。やがて別れの時がきて、王子さまは、飛行士におくりもの——しみじみとうれしいこと——をしてふるさとの星に帰る。

あとがきでは、星が一つ空に輝き、果てしない砂漠が描かれていて、次の文章に続く。

……前略。王子さまが、この地球の上にはすがたを見せ、それからまた、すがたを消したのは、ここなのです。……中略……もし、このところを、お通りになるようでしたら、おねがいですから、おいそぎにならないでください。そして、この星が、ちょうど、あな



たの頭の上にくるときを、おまちください。後略

……。 (注2)

『星の王子さま』は、現実の時間や空間の枠をこえた不思議なせかいであった。読みおえて、あらためて思ったことは、感じることや想像力についてである。

おとなにとつても、子どもにとつても、日常生活が想像力に満ちた、活気のある日々でありたい。子どもたちの生活の一瞬一瞬が、想像力にあふれていて、子どもが、現実のせかいともう一つのせかいを自由にゆききして、子ども時代を存分に生きることができるようにと願っている。

『星の王子さま』の訳者内藤濯氏は、愛蔵版の訳者あとがきで、次のように述べている。

著者サンレテグジュペリは、思いきり子どもの時代に親しんだ経験があり、子ども時代との自然なつながりを絶えず念頭において、それを新鮮ないのちの糧とした人であった(注3)。

## 注

1『星の王子さま』オリジナル版 サンレテグジュペリ作

内藤 濯訳 岩波書店 二〇〇〇年 九頁

2 同右 一三五頁

3『星の王子さま』 岩波の愛蔵版1 サンレテグジュペリ作

内藤 濯訳 岩波書店 一九七六年 一三六頁

## 参考文献

辻邦生・北杜夫「対話『星の王子さま』とぼくたち」『海』

臨時増刊号「子どもの宇宙」第十四卷第十三号 中央公論社

昭和五十七年

特集 サンレテグジュペリ 生誕一〇〇年記念特集『ユリイ

カ』第三十二卷第十号 青土社 二〇〇〇年七月号